東京学芸大学リポジトリ
Tokyo Gakugei University Repository

BGCパブリックアート鑑賞活動

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 東京学芸大学先端教育人材育成推進機構国際教育グループ 公開日: 2023-04-05 キーワード (Ja): パブリックアート, Daniel dela Cruz, ALAB NG PUSO, フィリピン国歌LUPANG HINIRANG キーワード (En): 作成者: 田代, 豪 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/00179943

BGCパブリックアート鑑賞活動

前在フィリピン日本国大使館附属マニラ日本人学校教諭
新潟県新潟市立上山中学校教諭　田代　豪

キーワード：パブリックアート、Daniel dela Cruz、ALAB NG PUSO、フィリピン国歌LUPANG HINIRANG

赴任校の現在
学校名：在フィリピン日本国大使館附属マニラ日本人学校
Manila Japanese School Attached to the Embassy of Japan
URL：https://www.mjs.ph/

1．　はじめに

資料１【ALAB NG PUSO】

マニラ日本人学校のあるBonifacio Global City(BGC)には多くのパブリックアートが設置されている。その中から、Daniel dela Cruzによる『ALAB NG PUSO』（資料１）に注目した鑑賞活動をオンラインで行った。生徒は、美術と社会のかかわりという見方・考え方を働かせて、設置物と設置された環境を関連付けて、作者の表現の意図の読み解きを行った。

2．　作品と街の歴史について

(1)　作品について

Daniel dela Cruzによる『ALAB NG PUSO』は、2017年にBGC内の飲食店が並ぶ「Hight Street」という通りの一角に設置された。

本作は、手紙を読む兵士、足元の封筒と機関銃、兵士の背面のスチールパネル、足元の複数の言葉のプレートから構成されている。まず、兵士の特徴である。兵士の束の間の休息をとらえたような像である。髪型や目鼻口がつくり込まれ、真剣な面持ちで手紙に目を落としている。また、機関銃を置いて階段に腰掛け、足を広げ、手紙を読む姿から比較的リラックスしている様子にも見える。しかし、半袖の軍服を着て、腰には拳銃を携帯していたり、靴の紐も固く結ばれていたりすることから、戦闘はまだ続いていることが伺える。

次に、兵士の背面にあるスチールパネルである。このスチールパネルには「LUPANG HINIRANG」と記されている。すなわちフィリピン国歌である。

そして、足元の複数の言葉である。この言葉は、タガログ語やその他のフィリピンの言語で、「愛」「犠牲」「自由」「平和」「希望」「未来」「共に」を意味する言葉が、兵士を識別する認識票のように階段に刻み込まれている。これらの言葉は、国歌「LUPANG HINIRANG」の「愛する自由への歌を奏でる」「もし汝を脅かす敵あれば　喜んで我が命を捧げよう」という歌詞と「愛」「自由」「犠牲」という言葉が合致する。また、歌詞には、「希望」「未来」「平和」「共に」という言葉は直接語られていないが、歌詞の文意に含まれるところがあるように思われる。

（2）　BGC の歴史について

BGC は、軍、戦争と大きくかかわっている。1898 年から BGC はアメリカにより統治され、軍事基地として利用された。また、1946 年にフィリピンが主権を獲得した後も、BGC は フィリピン軍の常任司令部となり軍の駐屯地として使われた。1990 年から BGC の軍用地が民間利用できるようになると、街から軍や戦争とかかわりのある施設が姿を消していき、街のイメージが一新されてきた。そして今日、フィリピン国内の大手企業が介入した商業都市となり、海外からの駐在員が住む街となっている。

3．　活動前の生徒の実態について

本活動は、中学部 2 年生の生徒を対象にした鑑賞活動である。生徒は、これまでの鑑賞の活動で、造形の要素を根拠に作品のよさや美しさを感じ取り、表現の意図を読み取ってきた。また、作品が制作された当時の時代背景に着目して表現の意図を読み取ろうとする姿も見受けられた。本活動前に「気になるパブリックアートはありますか」と問うたところ、生徒は、日本国内、BGC 内のパブリックアートを取り上げた。多くの生徒はパブリックアートと少なからずかかわりをもっていることがうかがえる。しかしながら、パブリックアートには、どのような作者の意図が込められているのかを読み解こうとするまでには至らず、また、作品が設置された場所に着目している生徒もいなかった。

4．　指導について

本来であれば、作品が設置されている場所に出かけ、自分の目で見て、肌で感じて作品鑑賞を行うのだが、休校中のため、オンラインによる鑑賞活動となった。そこで、オンラインの特性を生かした教具を整備した。

○　PDF により作品の写真を複数枚提示する。

この手だてにより、生徒は、作品の全体像を見ることはもちろん、自分が気になった写真を拡大して、作品の細部を見ることができる。その結果、提示された写真から作品の全体像を想像し作品をとらえることができる。

○　Google の「JamBoard」で個人の意見を全体で共有する。

この手だてにより生徒は、自分一人では見いだせなかった造形の要素や社会的な文脈に気付くことができ、作品を読み解く手がかりを得ることができる。

○　インターネットによる検索を活用する。

この手だてにより生徒は、分からない語句を調べたり、作品にかかわるフィリピンや BGC の歴史を調べたりすることができる。このような検索機能によって、一層幅広い視点から作品をとらえることができるようになる。

5．　活動中の生徒の記録について

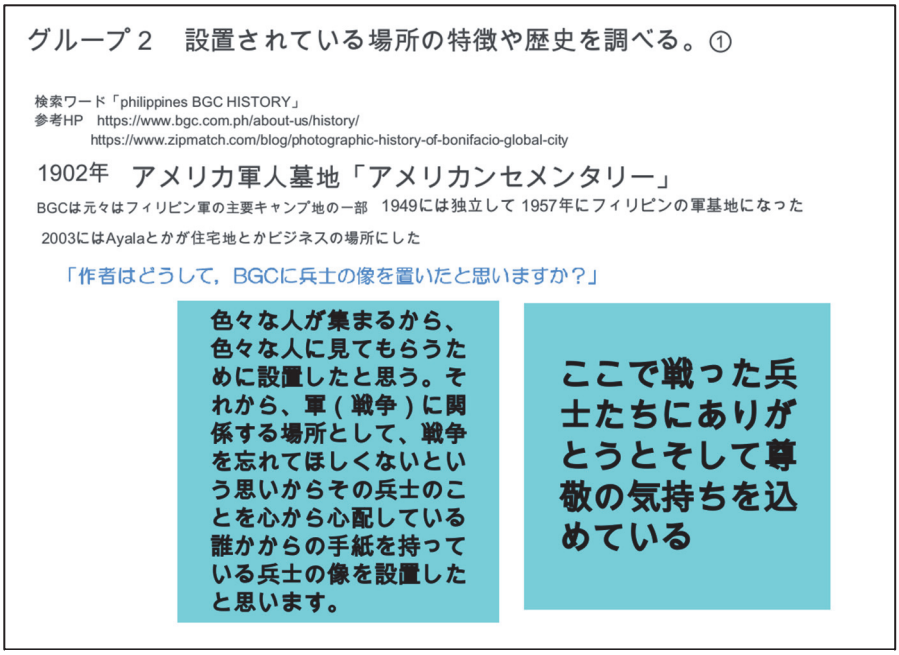
⑴　作品の分析

事前に JamBoard を使ったジグゾー学習により、「設置された兵士の特徴」「設置されている場所の特徴や歴史」

「パネルや文字の意味」の３つのグループに分かれて、作品の特徴を分析した。

グループ１では「設置された兵士の特徴」について分析した。生徒は、つくられた兵士のポーズ、表情を関連付けて、兵士の気持ちを想像したコメントを残した。

グループ２では「設置されている場所の特徴や歴史」について分析した。生徒は、BGC の歴史が紹介されているサイトから情報を抽出し、スライドに集めていった。このグループは、資料２で見られるように、BGC の場所の特徴と兵士の像がとっているポーズとを関連付けて、兵士の像の設置理由を分析していることがうかがえた。



資料２　【グループ２の JamBoard】

グループ３では「パネルや文字の意味」について分析した。生徒は自身の英語能力や経験、翻訳アプリを活用して、作品タイトル、パネル、言葉の意味について調べてスライドにまとめていった。スライドには「フィリピン国歌は戦時の気持ちが入っている歌なのでパネルを作品にいれたのだと思います」とコメントした生徒もおり、フィリピンの歴史と国歌のパネルを関連付けて構成物の意図を考えている姿が伺えた。

（２）　主題の読み解き

手紙を読んでいる兵士から「お疲れ様です。戦争に戦ってくれてありがとう」というメッセージを感じます。国歌は戦時の気持ちや英雄に憧れているような歌詞があるので戦争に戦ってくれた兵士たちに「あなたたちは私たちの英雄です。」のメッセージがあると思います。①　下のパネルはみんながこれからもずっとそうなってほしいというみんなからの願いだと思います。②

最後ハイストリートに設置した理由は色々な人が集まるから、色々な人に見てもらうために設置したと思います。③　それから、戦争に関係する場所として、戦争を忘れてほしくないという思いからハイストリートに設置したと思います。そしてホテルの近くにあって宿泊客の目に付くところなので世界中の人たちから見てほしいという思いもあると思います。③

【生徒Ａの読み解き】※下線、丸数字は筆者加筆

生徒Ａは、これまでの得た作品の情報から本作品の設置物と BGC との関係性に着目し、自分の意見を述べている。生徒Ａは、美術と社会のかかわりという見方・考え方を働かせて、手紙を読む兵士の像と背後の国家のパネルを関連付けて、「戦争に戦ってくれてありがとう」「あなたたちは私たちの英雄です」というフィリピンの国にとっての兵士の意味について述べている（下線部①）。さらに、階段の言葉とも関連付けて、国民の願いが兵士の支えとなっていることに言及している（下線部②）。また、BGC の歴史に触れ、本作品が「世界中の人たちから見てほしいという思い」という、パブリックアートの意義を踏まえて、設置場所の理由について述べ

ている（下線部③）

このように生徒Aは、JamBoardでの学習で得た知識を活かして、設置物の造形の要素と設置場所の社会的な文脈を複数関連付け、表現の意図を具体的に説明している。また、作品からフィリピンが大切にしている精神性や創造性などを複数感じ取り、現在のBGCの状況と関連付けて説明している。

６．　成果と課題について

＜手立て＞　オンラインの特性を活用した教具を整備する。

PDF による資料の提示は、当時、現場で作品を見られなかったため、複数の角度から撮影した写真は作品をとらえる上で有効であった。またJamBoardによる意見の集約は、複数の生徒と意見の交流ができ、意見をまとめることができた。この手立ては、作品の分析と読み解きに有効であった。

７．　終わりに―国際理解教育－

日本とフィリピンで戦争を主題とした作品について比較する。

日本では、第二次世界大戦の終戦前までは、兵士の功績を称えるような作品が、制作され発表されている。第二次大戦中、国家総動員法の制定によって多くの作家が従軍し、国威発揚のプロパガンダとして作品が使われてきたためだ。しかし、終戦後、戦争を主題にした美術作品は大きく変わった。香月泰男の『シベリア・シリーズ』に代表されるような、戦争という個人的体験を深化させた作品が発表されたり、丸木位里・俊夫妻が手掛けた『原爆の図』のシリーズでは、戦争の悲惨さや平和に生きることへの願いを後世に広く伝え残すような作品が発表されたりした。

ここに日本人とフィリピン人との平和と戦争に対する価値観の違いが美術作品を通して表れているように思う。平和を求めていることは、日本もフィリピンも変わりはない。日本は戦後、戦争を主題とした作品は、「鎮魂」「慰霊」という意味合いを強くもたせ、恒久の平和を願っているように思える。

しかしながらフィリピンでは、本稿で取り上げた作品からも、平和のための戦いという意味合いを強く感じる。この戦争を主題とした作品観の違いは、フィリピンがかつてスペイン、アメリカ、日本の支配下にあったことと無関係ではない。そのため、二度と母国の自由や平和が奪われないようフィリピンでは国歌「LUPANG HINIRANG」に、「自国の平和や自由を脅かすものがあれば、躊躇なく戦う」という精神が込められているのではないだろうか。